

令和6年度弘前市立郷土文学館運営委員会 会議録【要旨】（第1回）			
日時	令和6年6月4日（火）15時00分～16時00分		
場所	弘前図書館2階 会議室	傍聴者	0人
出席者 (敬称略)	委員長 藤田 晴央 副委員長 井上 諭一 委員 浅瀬石 久仁子 委員 宮崎 新 委員 帆苺 基生 委員 桶田 久美子 委員 鈴木 溪心 委員 今谷 弘		
欠席者	なし		
事務局側 出席者	郷土文学館館長 黒滝 雅信 郷土文学館企画研究専門員 櫛引 洋一 弘前市教育委員会生涯学習課長 原 直美 図書館・郷土文学館運営推進室長 山田 俊一 図書館・郷土文学館運営推進室主査 黒崎 みお		
配布資料			
資料1	令和5年度	事業実績	
資料2	令和5年度	観覧者数・観覧料	
資料3	令和5年度	刊行物販売数	
資料4	令和5年度	資料収集状況	
資料5	令和6年度	事業内容	
次 第			
1	開会		
2	議事		
	(1) 令和5年度弘前市立郷土文学館事業実績について（報告）		
	(2) 令和6年度弘前市立郷土文学館事業について		
	(3) 今後の事業等について		
3	事務連絡		
4	閉会		

会議内容【要旨】	
事務局	<p>開会</p> <p>議事（1）令和5年度弘前市立郷土文学館事業実績について（報告）</p> <p>（資料1・2・3・4に基づき説明）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和5年度企画展テーマは、佐藤愛子生誕100年という記念すべき年であることから、第47回企画展「小説『花はくれない』－佐藤愛子が描いた父・紅緑－」とした。 ・観覧者数は3,908人。前年度と比較して1,000人以上を上回る結果となった。 ・企画展に関連した記念講演会（8月19日開催）は、88人の受講者となった。 ・スポット企画展は、春夏秋冬の季節ごとに5つの展示を開催した。 <ul style="list-style-type: none"> 春：「生誕100年佐藤愛子展」 夏：「マンガふるさとの偉人 陸羯南 原画展」 秋：「生誕120年サトウハチロー展」 冬：「新収蔵資料展」・「現在活躍中の作家展」 ・「新収蔵資料展」は、1,000点以上寄贈された長部日出雄の資料がを中心に展示を行った。 ・2階の石坂洋次郎記念室では、年に2回の展示を行っている。 <ul style="list-style-type: none"> 1回目：「石坂洋次郎の文学碑を訪ねて」 2回目：「石坂洋次郎の特装本」 ・「石坂洋次郎の特装本」では、1冊が10万円以上する特装本を展示し、話題を呼んだ。 ・ラウンジ企画は2つ行っている。 <ul style="list-style-type: none"> ①「北の文脈文学講座」：5月～12月の第3土曜日に年8回、文学愛好家向けの講座として開催。 ②「ラウンジのひととき」：5月～12月の第1土曜日に年8回、音楽の演奏会や朗読、映像を通したドラマリーディングなど、一般の方にも文学を楽しんでもらうため開催。 ・ロビー展は、常設作家10人と長部日出雄を加えた11人の忌日を「文学忌」として無料開館し、その忌日前後一週間は、各作家の展示をしているもの。

	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館実習や社会教育実習も例年どおり行っている。 ・令和 5 年度は新事業として、市教育委員会で発行したマンガ陸羯南を活用し、依頼のあった小・中学校等へ出向いて『マンガ陸羯南』出前講座」を実施。 ・令和 5 年度の観覧者数は総計 3,908 人。令和 4 年度の 2,817 人と比較して 1,091 人の増となった。 ・刊行物販売数は、年間で 318 冊であった。 ・資料収集状況について、総計 66 点の資料を購入した。 ・寄贈資料の総計は 1,349 点となっており、長部日出雄の資料が 1,000 点以上が寄贈された。 ・令和 5 年度の総計を含め、現在、郷土文学館の資料は、1 万 9,319 点の所蔵数となっている。
<p>事務局</p>	<p style="text-align: center;">議事（2）令和 6 年度弘前市立郷土文学館事業について</p> <p>（資料 5 に基づき説明）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画展は、第 48 回企画展「文学紀行－青森県の名湯」として、明治以降に青森県を訪れた著名な文人をはじめ、県内在住の文人が描いた温泉の名湯を、文章をとおして展示するもの。 ・スポット企画展は、以下を予定している。 <ul style="list-style-type: none"> 春：「没後 80 年岩谷山梔子展」 夏：「生誕 110 年久藤達郎展」 秋：「追悼・山田尚展」 冬：「新収蔵資料展」・「津軽の文学の祖・建部綾足展」 ・「津軽の文学の祖・建部綾足展」は、市立博物館の企画展「いのちなりけり没後 250 年建部綾足」の時期に合わせた展示にすることで、博物館と文学館の両方で盛り上げていきたい。 ・石坂ミニ企画は、「文学紀行－青森県の名湯」という企画展に合わせ、1 期、2 期に分けて展示する予定。 ・「北の文脈文学講座」、「ラウンジのひととき」、ロビー展、その他の事業については、昨年度と同様に実施していきたいと思っている。
<p>事務局</p>	<p style="text-align: center;">議事（3）今後の事業等について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の事業について、委員のみなさまのご意見を伺いたい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の企画展について、今まで大々的に取り扱ったことのない短歌に目を向けた展示を検討したい。 ・令和7年度は寺山修司の生誕90年であることから、寺山修司と青森県で初めて角川短歌賞を受賞した歌人である中村雅之を対応させる展示を案として考えている。 ・企画展については2つ課題がある。 ・1つは、今年度の「文学と温泉」や、以前開催した「岩木山と文学」のような新しいテーマでどういったものが考えられるかというもの。 ・もう1つは、10人の常設作家の中で、葛西善蔵、平田小六、今官一の3人の図録が作製されておらず、この3人について、どのような形で企画展を行っていけばいいかというもの。 ・たとえば、一戸謙三は「追憶と郷愁の詩人」、佐藤紅緑は「佐藤愛子が描いた父 紅緑」という切り口で展示を行った。 ・葛西善蔵、今官一、平田小六をどのような切り口で展示構成をすればいいのか。 ・以上の2点、企画展の新しい形のテーマでどのようなものが考えられるか、ということと、図録未作製の作家をどのような切り口で展示構成を考えていけばよいかということについて、ご意見等伺いたい。 <p style="margin-top: 20px;">委員からの主な意見等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校職員の図書委員の研修は行っているのか。 ・短歌以外にも川柳なども取り扱ってはどうか。 ・「弘前市在住」や「弘前大学出身」ということを明らかにしているライトノベル作家や漫画家、現在30～40歳代の若い作家を取り上げることでネット適性の高い、若い層の集客につながるのではないか。 ・ネット上で検索し、この郷土文学館にたどり着くという過程ができればうまくいくのではないか。 ・常設展示作家については、固定化するのではなく、入れ替えを検討することも必要ではないか。 ・弘前出身の寺山修司、旧制弘前中学卒業の秋田雨雀、関連がある鈴木喜代春や北島八穂なども候補に入れられるのではないか。 ・日本現代詩歌文学館では、全国の詩人や歌人に「インテリア」というテーマで執筆してもらったオリジナル原稿により「インテリアと詩歌」
--	--

委員

	<p>という展示をしている。同様の形で、たとえば「あなたのリンゴの思い出について」というテーマで、中央で活躍している作家や詩人たちに原稿依頼し、そういう原稿が青森県関連の作家や詩人たちと一緒に並ぶというのも文学的な広がりがあるのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none">・仙台文学館では、仙台在住の現在の作家を前面に押し出して「震災と文学」をテーマに、文学を博物館や文学館の中だけに閉じ込めず、街にだそう、街と交流しようというイベントをいろいろ開催している。また漫画家、ライトノベルの作家も文学者の中に混ぜて、若い人に訴えかけるような展示を行っていたことに感銘を受けた。・横手市増田まんが美術館では、日本で最初の「マンガ原画」をテーマとした美術館となっている。漫画の原画は今後、非常に世界的に価値が高まると想定されることから、それを保存する場所が必要だとして、収蔵庫を整備し、学芸員を配置して展示室が作られている。弘前でも「ふらいんぐういっち」「じいさんばあさん若返る」といったアニメ化されるような人気の弘前市在住の漫画家もおり、漫画の原画を郷土文学に含めて保存活用してはどうか。・弘前は学生の街であるので、学生の活動と文学館との関連性をもっと高めていけたらいいのではないか。・展示の仕方について、博物館的な展示ではなく、美術館的なものにシフトしたほうが、見に来る方は多いと思う。日本現代詩歌文学館ではオリジナルで執筆いただき、アートとして展示している。そのほか作家や詩人に作品を朗読してもらい、展示会場に流すなどビビットなアートとして文学を感じることができるようになっている。・常設展は男性作家ばかりで、板垣直子や作家の三浦雅士の妹の三浦徳子など、現在の弘前中央高校、昔の高等女学校のいわゆる才女たちの資料も収集が必要ではないか。・世の中の評価が定まっていないポップな領域を含めて、スポット企画展などで文学館が発信し、保存して再評価するなど、公立の文学館としての意味を明確にすることも必要ではないか。そうすることで、観光資源として入場者数の増加が見込まれるのではないか。・津軽を題材にした曲の歌詞を調べたことがあるが、弘前や青森の出身ではない人が弘前や岩木山を題材に書いていることが多いと感じた。そのことを弘前に住んでいる人たちが実感できると、地域を考えるきっかけになるのではないか。
--	---

	<ul style="list-style-type: none">・「弘前乃怪」という怪談のユニットが弘前にあり、図書館の郷土コーナーにも揃っている。弘前は怪しげな部分を持つ街だと感じており、そういう土地柄を含めた展示をすることで、若い世代の興味を得られるのではないかと。・どのような本があるか、どのような本が興味を持たれているかといったことを、研究したり、テーマを探求するためにはもっと多くの人を巻き込む必要があり、郷土文学館の職員だけでは難しいのではないかと。高等学校の探究活動を行う生徒や大学の学生たちを巻き込み、一緒にテーマを探ったり研究することができないか。文系の学生は、特に深い研究をすることが難しいと感じていて、郷土文学館や大学の方と協力できればいいと思う。・高校生や大学生を巻き込んだ研究について、ネット上の発表であれば人手や場所の問題も解消できるのではないかと。・郷土文学館が所蔵している資料への外部からのアクセス状況はどうなっているのか。郡山市文学資料館では、かなり完備したデータベースをもっている。いろいろ問題はあるかと思うが、できるだけ外部からデータベースにアクセスしやすくなっているほうがいいと思う。市のホームページのデザイン等も改善の余地がある。・弘前市はインバウンドで海外から観光客が多く来ていように感じている。このような人たちにも、郷土文学館に来てもらうことを考える必要がある。現在開催中の「岩谷山梔子展」では、きれいな短冊に流麗な筆でかかれた短冊の数々に非常に素晴らしいと感銘を受ける。かかっている内容がわからなくても見るだけで素晴らしいと感じられるものは、外国人観光客向けではないか。蘭繁之の豆本についても、内容がわからなくてもこんなに小さなものに精巧に書かれているという部分で外国人の方にも見てもらえるものではないか。文学をアートとして展示するという視点で外国人の方にも伝えられるものではないか。・今回の企画展の温泉についても、翻訳したりするのは難しいかもしれないが、外国人の方は温泉地を非常に好んでいる。青森県には温泉地が多くあり、文学者がいろいろな作品で表現しているという部分で今まで入館してもらえなかった層や外国人観光客の方にも見てもらえるものではないか。
--	--

事務局	<p>事務局側対応等</p> <ul style="list-style-type: none">・学校図書委員の研修会については、主催者から要請があれば見学に対応している。・川柳についても、将来的に取り扱いを検討したい。・常設展示については、開館当初に、ご遺族から寄贈された資料をもとにした展示となっており、ご遺族と当館との信頼関係で今までやってきている。それを変えていくときには、そのご遺族の方たちとの関係性をどのように調整しながらやっていくかということを、非常に丁寧にやっていかなければならないと思っている。・新たな資料収集については、積極的に収集したいと思っているが、収蔵庫がかなり満杯に近い状態であるため、資料の価値を見極めて収集していく必要がある。・女性作家や最近の作家についても、いろいろな形や切り口で展開方法を考えていきたい。・ご意見のあった新しい作家やテーマについては、当館にデータの蓄積がほとんどない状況であるため、委員のみなさまが、今まで知り得たものや蓄積のものがあれば、ご協力いただき、それらをベースにしながら考えていきたい。 <p>事務連絡</p> <p>閉会</p>
-----	---